



18 柿沼さんは写真以外も絵手紙などアートを広げる活動中
 16 麻産地の森田さん。本誌18年6月号「農業アップデート」にも登場した
 13 貝掛さんの得意メニュー「エイジング塗装」のセミナー最終日のSNS投稿から
 11 WRCでの「よりみち屋」出店時。真ん中が山岸さん
 9 12月16日(日)「3ビズマルシェ in 彩の国ファーマーズマーケット@ウニクス上里」で出店のひがのさん
 7 発行したヴィーガンマップ委員たち。右から二番目がやまださん
 5 ラグビー紙芝居制作の鈴木さんのスマホをサポートする増子さん
 3 市タグラグビー普及事業のオープニングセレモニーの様子。ニャオさねの右側が宮崎さん
 1 夏の「星川夜音」出演時の工藤さん
 14・20 左・俄然風太さん 右・ことなさん
 19 鈴木さん、2019年秋、愛犬びーちゃん、長男との3ショット
 17 市民活動支援センター・チェアユーザーにも就任。「困ったこと共有会談-台風19号」でも体験を披露した
 15 奥がカディージさんとオサムくん。左から2番目ナールのカナムウルさんは帰国して出産予定。右から2番目台湾の呉さんはさらなる日本語スキルアップをめざす
 12 講習中の白倉さん。熊谷だけでなく深谷、本庄などにも活動を広げている
 10 ぶくださん。どうそい喫茶やまこにて
 8 農家で仕入・収穫する奥川さん
 6 昨年のNPO総会。前列中央が奥野さん
 4 佐谷田神社宮司・コロコロ研究所所長の川端康稔さん
 2 RWCファンゾーンでも、ミートファイターきゃんぴらさんいつもの肉ネタが炸裂

熊谷 2020 TO DO

2020年、熊谷で／熊谷から実現したい20のこと

「一生に一度」のラグビーワールドカップ(RWC)開催を過ぎ、新たな時代に入る2020年熊谷。令和最初でもある新年に20人から、今年「熊谷で／熊谷から 実現したいこと」をきいた。(取材・文 小林真真)

※20人は編集部とSNSでの呼びかけに応じた他薦と自薦。団体などの名称は、通称を使っています。

カードを手がけ、「108カ方エ」での展示会も開催。「感謝！感謝！感動！」の二年だったという。

「2020年は並びながらして、根拠もなく『最高の年』。実際の植物を使う新しいアートの資格取得にチャレンジします。ストレス発散、自己表現、癒しなど多彩な要素がある『私流もつくりの楽しさ』を広めたいですね」

11 うどん体験の「よりみち屋」で「第7回埼玉建築文化賞 優秀賞(店舗部門)」を受賞した設計士・山岸光信さん。熊谷で独立して4年目の昨年は人生最大規模の保育園はじめ多くの依頼があり、ボランティアなどの地域活動が芽を出し美を結び始めたという。

「今年はそれらの建築が完成し、世間に対して実現する年。たくさんの人と会って話したいし、何より家族との時間を大切にしたいです」

12 ダンボール箱を使って生ごみを堆肥にし、ごみ減量で地球温暖化防止に効果をあげるダンボールコンポスト。サラリーマンのかたわら、市民グループ「ハチドリくらぶ」の一員として普及活動が続けるのが白倉俊也さんだ。「もうすぐ10年。家族に休日活動することをよく思われない期間が長かったですが、何があってもやめないで『本気なんだ』と考え、いや、あきらめましょうか。今では支え応援してくれています。おかげで福岡のNPO循環生活研究所でコンポストアドバイザーの資格も習得できました。これからはたろき方として、やりがい、ライフワークと収入のバランスは大事ですね」

「魔法の箱ダンボールコンポスト」を熊谷市に広げ、継続していく仕組みを作る!!

1 RWCに動かされ、熊谷登場が激増のFMクマガヤネーム(吹上の車いす青年)こと工藤龍也さん。ラグビー国歌合唱団や星川夜音での「夜音ライブ」、サンタ学校などから、車いす利用の立場からの発信へと活動範囲を広げつつある。

「実現したいのは、障がい者と社会をもっとつなげる。個人では、もっと仕事を収入アップしたいです」

2 やはりRWCをきっかけに知名度が上がってきたのがフリー芸人・ミートファイターきゃんぴらさんだ。16年にお笑い養成所卒業後、地元熊谷で肉に関する仕事を始めたのを機に、大好きな肉をお笑いに融合できないかと試行錯誤。「ミートファイターきゃんぴら」が生まれたという。熊谷を盛り上げようと、大好きな肉ネタで地元デビューしたのが18年7月。以降ラグビー合唱団への参加や子ども食堂「なないろ食堂」などでも注目を集め、RWCではファンゾーンのステージにも立った。唯一無二の芸風もさることながら、いつも子どもの気持ちやだいちに考えるやさしさが地域で愛される理由という関係者もいる。

「2020年は全国放送でネタを披露して有名になり、地元熊谷をもっと盛り上げていきたいです」

3 RWCの次といえば、東京オリンピックの活躍を期待した女子セブンスのアルカス熊谷、ハイパフォーマンスネージャー・宮崎善幸さんは、東京2020以降を見据えて語る。

「小中高生のアカデミー選手は現在52人。熊谷の産学官連携で、切れ目なく育成できる体制を整えたいですね。その先は『世界』に向かってます」

100人の熊谷市民に伝え、60人をサポート・フォローしたいです」

SNSでの呼びかけに「僕を取材して下さい」と応えたのが「どんちゃん」こと員掛攻さん。昨年まで都内を中心に塗装リフォームなどの業務を行ってきたが、RWCからオリビックイヤーで盛り上がる地元、熊谷正面に事務所移転を決めた。塗装を手がけた、中学同級生・青山延子さん実家のイベントスペース「二二夜」も刺激になったという。社名も「ハッピー」から「アイラブハッピー」と変更。

「熊谷を中心に、ワークショップやセミナー、お茶会、習い事など地元密着型のイベントを開催する予定。市民のみならずハッピーになれたらという気持ちで、交流を深める場になればいいと思います」

14 市内でゲイバー「俄然風太」と居酒屋「酒彩さくら」を経営しながらタレント活動を展開する俄然風太さん。昨年は初めての海外だったハワイ旅行が何よりの思い出という。「初めての経験にドキドキワクワク。沢山の刺激を受けました！言葉は伝わらなくても心は繋がるんだなと実感。ハワイに友達も出来ました」とどこまでも前向きだ。

「地球は一つ、世界も一つ文化は違えど同じ人として同じ空の下で生きている。今年も海外行きます」

15 外国人のための日本語学習スクール「パール」で週一回市民活動支援センターを訪れるモロッコ出身のカディージヤさん。在住の深谷市はじめてこうした勉強会によく参加してコミュニティを広げ、昨年のトピックは寄居での映画エキストラ出演とい

お正月忙しい人が、佐谷田神社宮司／コロコロ研究所所長の川端康稔さん。「あらゆる事象にもともと意味など無いことを伝えるのがライフワーク。40歳を過ぎた最近、腹が出てきたのを実感している」といふ。

「新年の抱負は、『この世の全てをより良くすること』と『肉体に対する新たな意味づけ』とします」

5 昨年「小学生ボランティアリーダーサポート」を起ち上げた東小5年生・増子真一郎さん。市民活動支援センターで名刺を配って営業し、ユニチューブ投稿などシアターのマホライブをお手伝いした。ほかにもさまざまなイベントへの参加で世界を広げ、夢は大きい。

「自分のデザインの熊谷染をしてみたい。それから、花火大会で自分の花火を打ち上げられたらいいな」

6 「貧富の差はそのままに社会から貧困をなくす」をミッションに掲げるNPO法人あいだ・奥野大地さん。昨年は県北で初めての自立援助ホームを開設したほか、空手教室など活発になってきた。今年は新たなチャレンジがある。

「子ども食堂は、拠点が固定されると近くの子ともしか来られません。なら魅力的なキッチンカーに来てもらって、居場所をあちこちにつくればいい。初回1月16日市民活動支援センターでの『あい♡だいな』には、深谷からパンチャビエーナさんのキッチンバイクに来てもらいます」

7 本誌「キラッとさん」二人連載の一人やまだみきさんは昨年「変化と素晴らしい出会い、学びに満ちた年」と振り返る。ロード／ヨガ指導家・秋山桃子氏は

う。ちよこまかと動き回るもうすぐ3歳のオサムくんは、シニア主体の平日午後の支援センターを和ませる貴重なキャラクターだ。今年実現したいのは、「日本語検定3級です」

「日本語検定3級です」

熊谷から海外に出て学んでいるのは、大里地区出身でオランダ農業大学2年の森田早紀さん。昨年は大学のプロジェクトで日本では栽培が禁じられている麻を育て、海産の魅力や農園経営について沢山学んだという。2020年は、「熊谷の食と農に貢献するアイデアを練っては発信して、実現に近づきたいです」

熊環連、ニャオさねまつり実行委員会など市民活動、NAOZANEポストステインングと多忙なシアタ町直昭さん。在住・妻沼日向団地の地域防災にも取り組んでいるが、「災害がない」が決まり文句だった熊谷に大きな脅威を与えた台風19号の体験から新たな目標を設定した。

「防災士の資格 取ろうと思っただけいね」

18 柿沼春枝さんが代表を務める女性限定の写真スクール「美」は結成10周年を迎え、11月に展示会、記念カレンダー配布、約54万円の寄付を集めて台風19号被災地に寄付した。「熊谷のいいところの記録を始めたのは、住んでいるのに『熊谷なんて』といった友人にこの地域のよさを自慢したかったから」といふ。

「今年スタートしたいのは、地域のいろんな人を撮る『熊谷市の人』シリーズ。わたしたちが展示をするのと女の人が動いてお金も動くから、17号沿いのシャッター商店あたりでぜひやりたいですね」

20 締めくくりは「キラッとさん」担当もう一人・ことなさん。

「2020年はオリビックイヤー。夏がとても楽しみ♡あつという間に経ってしまいう年、年に冊は本を出版していきたいので、本作りを引き続き進める。新しいニャオさねのイラストもがんばる。それから来月2月は、市役所近くのメガネ屋さん、ガラスアーカスさんで作品展をやります。

キラッとさんもまだまだ熊谷にたくさんいる素敵な方々を紹介していきたい！あとは、なにげない愛おしい日常を大切にしていきたい」

それぞれ20の「TO DO」。いやごに書かれていない約20万が合わさってひとつの熊谷ができていく。そしてそれぞれ「実現したいこと」が交差していけば、20万はそれこそ「ねずみ算」式に増えていくだろう。子年の熊谷。いい熊谷の思いはひびいた。

1 RWCに動かされ、熊谷登場が激増のFMクマガヤネーム(吹上の車いす青年)こと工藤龍也さん。ラグビー国歌合唱団や星川夜音での「夜音ライブ」、サンタ学校などから、車いす利用の立場からの発信へと活動範囲を広げつつある。

「実現したいのは、障がい者と社会をもっとつなげる。個人では、もっと仕事を収入アップしたいです」

2 やはりRWCをきっかけに知名度が上がってきたのがフリー芸人・ミートファイターきゃんぴらさんだ。16年にお笑い養成所卒業後、地元熊谷で肉に関する仕事を始めたのを機に、大好きな肉をお笑いに融合できないかと試行錯誤。「ミートファイターきゃんぴら」が生まれたという。熊谷を盛り上げようと、大好きな肉ネタで地元デビューしたのが18年7月。以降ラグビー合唱団への参加や子ども食堂「なないろ食堂」などでも注目を集め、RWCではファンゾーンのステージにも立った。唯一無二の芸風もさることながら、いつも子どもの気持ちやだいちに考えるやさしさが地域で愛される理由という関係者もいる。

「2020年は全国放送でネタを披露して有名になり、地元熊谷をもっと盛り上げていきたいです」

3 RWCの次といえば、東京オリンピックの活躍を期待した女子セブンスのアルカス熊谷、ハイパフォーマンスネージャー・宮崎善幸さんは、東京2020以降を見据えて語る。

「小中高生のアカデミー選手は現在52人。熊谷の産学官連携で、切れ目なく育成できる体制を整えたいですね。その先は『世界』に向かってます」

100人の熊谷市民に伝え、60人をサポート・フォローしたいです」

SNSでの呼びかけに「僕を取材して下さい」と応えたのが「どんちゃん」こと員掛攻さん。昨年まで都内を中心に塗装リフォームなどの業務を行ってきたが、RWCからオリビックイヤーで盛り上がる地元、熊谷正面に事務所移転を決めた。塗装を手がけた、中学同級生・青山延子さん実家のイベントスペース「二二夜」も刺激になったという。社名も「ハッピー」から「アイラブハッピー」と変更。

「熊谷を中心に、ワークショップやセミナー、お茶会、習い事など地元密着型のイベントを開催する予定。市民のみならずハッピーになれたらという気持ちで、交流を深める場になればいいと思います」

14 市内でゲイバー「俄然風太」と居酒屋「酒彩さくら」を経営しながらタレント活動を展開する俄然風太さん。昨年は初めての海外だったハワイ旅行が何よりの思い出という。「初めての経験にドキドキワクワク。沢山の刺激を受けました！言葉は伝わらなくても心は繋がるんだなと実感。ハワイに友達も出来ました」とどこまでも前向きだ。

「地球は一つ、世界も一つ文化は違えど同じ人として同じ空の下で生きている。今年も海外行きます」

15 外国人のための日本語学習スクール「パール」で週一回市民活動支援センターを訪れるモロッコ出身のカディージヤさん。在住の深谷市はじめてこうした勉強会によく参加してコミュニティを広げ、昨年のトピックは寄居での映画エキストラ出演とい

お正月忙しい人が、佐谷田神社宮司／コロコロ研究所所長の川端康稔さん。「あらゆる事象にもともと意味など無いことを伝えるのがライフワーク。40歳を過ぎた最近、腹が出てきたのを実感している」といふ。

「新年の抱負は、『この世の全てをより良くすること』と『肉体に対する新たな意味づけ』とします」

5 昨年「小学生ボランティアリーダーサポート」を起ち上げた東小5年生・増子真一郎さん。市民活動支援センターで名刺を配って営業し、ユニチューブ投稿などシアターのマホライブをお手伝いした。ほかにもさまざまなイベントへの参加で世界を広げ、夢は大きい。

「自分のデザインの熊谷染をしてみたい。それから、花火大会で自分の花火を打ち上げられたらいいな」

6 「貧富の差はそのままに社会から貧困をなくす」をミッションに掲げるNPO法人あいだ・奥野大地さん。昨年は県北で初めての自立援助ホームを開設したほか、空手教室など活発になってきた。今年は新たなチャレンジがある。

「子ども食堂は、拠点が固定されると近くの子ともしか来られません。なら魅力的なキッチンカーに来てもらって、居場所をあちこちにつくればいい。初回1月16日市民活動支援センターでの『あい♡だいな』には、深谷からパンチャビエーナさんのキッチンバイクに来てもらいます」

7 本誌「キラッとさん」二人連載の一人やまだみきさんは昨年「変化と素晴らしい出会い、学びに満ちた年」と振り返る。ロード／ヨガ指導家・秋山桃子氏は

う。ちよこまかと動き回るもうすぐ3歳のオサムくんは、シニア主体の平日午後の支援センターを和ませる貴重なキャラクターだ。今年実現したいのは、「日本語検定3級です」

「日本語検定3級です」

熊谷から海外に出て学んでいるのは、大里地区出身でオランダ農業大学2年の森田早紀さん。昨年は大学のプロジェクトで日本では栽培が禁じられている麻を育て、海産の魅力や農園経営について沢山学んだという。2020年は、「熊谷の食と農に貢献するアイデアを練っては発信して、実現に近づきたいです」

熊環連、ニャオさねまつり実行委員会など市民活動、NAOZANEポストステインングと多忙なシアタ町直昭さん。在住・妻沼日向団地の地域防災にも取り組んでいるが、「災害がない」が決まり文句だった熊谷に大きな脅威を与えた台風19号の体験から新たな目標を設定した。

「防災士の資格 取ろうと思っただけいね」

18 柿沼春枝さんが代表を務める女性限定の写真スクール「美」は結成10周年を迎え、11月に展示会、記念カレンダー配布、約54万円の寄付を集めて台風19号被災地に寄付した。「熊谷のいいところの記録を始めたのは、住んでいるのに『熊谷なんて』といった友人にこの地域のよさを自慢したかったから」といふ。

「今年スタートしたいのは、地域のいろんな人を撮る『熊谷市の人』シリーズ。わたしたちが展示をするのと女の人が動いてお金も動くから、17号沿いのシャッター商店あたりでぜひやりたいですね」

20 締めくくりは「キラッとさん」担当もう一人・ことなさん。

「2020年はオリビックイヤー。夏がとても楽しみ♡あつという間に経ってしまいう年、年に冊は本を出版していきたいので、本作りを引き続き進める。新しいニャオさねのイラストもがんばる。それから来月2月は、市役所近くのメガネ屋さん、ガラスアーカスさんで作品展をやります。

キラッとさんもまだまだ熊谷にたくさんいる素敵な方々を紹介していきたい！あとは、なにげない愛おしい日常を大切にしていきたい」

それぞれ20の「TO DO」。いやごに書かれていない約20万が合わさってひとつの熊谷ができていく。そしてそれぞれ「実現したいこと」が交差していけば、20万はそれこそ「ねずみ算」式に増えていくだろう。子年の熊谷。いい熊谷の思いはひびいた。